

Wesley Hall News

第76号 2003年4月1日 発行 青山学院宗教センター(ダイヤルイン03-3409-6537) 編集 ウェスレー・ホール・ニュース編集委員会



本部前ロータリーの桜

目 次 (特集: 入学)

- | | |
|------------------------------------|--|
| ○ 説教 「狭い門」から入れ……… 清水 正…2 | ○ 特集 お天道さまが見ているから
—「人」を超えたもの ……… 西澤 宗英…9 |
| ○ 特集 信頼・喜び・感謝の御言に支えられて… 川島 样子…4 | ○ 青山学院資料センター所蔵のキリスト教
貴重文献・史料 その3 ……… 氷浦 健生…10 |
| ○ 特集 1日の生活は礼拝から ……… 横口 善…5 | ○ キリスト教図書紹介 ……… 松浦 浩樹…12 |
| ○ 特集 中等部新入生の皆さんへ ……… 布施 英俊…6 | ○ 私の教会 ……… 田中 立子…13 |
| ○ 特集 高等部新入生の皆さんへ ……… 小林 和夫…7 | ○ 宗教センターだより ……… 14 |
| ○ 特集 コメニウスと今日のキリスト教教育 ……… 前之園幸一郎…8 | |

「狭い門」から入れ

マタイによる福音書 7：13, 14

清水 正



青山学院の各部に入学された皆さん、おめでとう。皆さんは難関と言われている「狭い門」（入るのが難しい門）をくぐり抜けて青山学院の生徒・学生になりました。一般に日本の学校は「入り口は狭いが出口は広い」と言われています。一度入ってしまえば、後はそれほど努力しなくとも広い出口からやすやすと出て行けるようです。このようなことであれば「狭い門」は本当に「狭い門」であると言えるでしょうか。皆さんは「狭い門」から入って来られたのですから、最後までその道を進み続けて欲しいと思います。そのことを考えてみましょう。

「狭い門」の出典は聖書の中にはあります。マタイ福音書7章13、14節には「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこからに入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない」というイエス・キリストの言葉が記されています。その言葉にあるように、「広い門」と「狭い門」があり、その門には道が続きます。広い門には広々とした道が、狭い門には細い道が。このように「広い門」は滅びに至る門であり、狭い門は命に至る門である、とはつきり区別されています。「入り口は狭いが、出口は広い」ということはありません。狭い門には細い道が最後まで続くのです。

これは譬えです。それでは何を譬えているのでしょうか。私たちの人生の在り方、日々の生き方を譬えているのです。

皆さんは希望をもって青山学院に入学されて来たと思います。それはどのような希望でしょうか。ここで希望を二種類に分けることができます。一つは自分の幸福を最終目的とする希望です。もう

一つは他人の幸福を最終目的とする希望です。希望は人生の目標と言い換えてよいでしょう。つまり自分のために、自分だけの幸福を目的として生きるか、それとも他人のために、他人を幸福にするために生きるか、という区別です。どちらが「狭い門」であり「細い道」であるかは、皆さんには分かっていると思います。

普通の考えでは、自分のために一生懸命に努力することは、たとえ目標が自分の幸福であっても、良いことと判断されるでしょう。自分のために生きることとは自立することであり、他人に迷惑をかけない立派な生き方であると言えるかも知れません。そのために学問をして、自分の能力を磨き、幸福な生活を勝ち取ることは悪いことではありません。しかしそれだけが人生の目標であると、自分の幸福を損なう者に対して敵愾心をもつことは当然のことになります。お互いが限界ある条件の中で、自分の幸福だけを最終目的とする生き方は、対立を生み、相互敵視を生み、相互不信を生みます。多くの人がこの自分の幸福を求める生き方を良い生き方、当然の権利であると考えています。

しかし私たちは一人で生きているのではなく、本当は助け合って生きているのです。そうであるとしたら、自分の幸福を最終目的とする生き方は本当に正しいと言えるでしょうか。助け合うとは、相手の幸福も考えて生きることです。

イエス・キリストは、一見あたりまえであり当然の権利と考えられている生き方を「広い門」に譬え、その門は広々としているが、その最後には滅びが口を開いて待ち構えていると警告されました。自分のために生きる人生の最後は滅びであると言う

のです。人生の最後には、自分の幸福が目的であつた人はその目的を失ってしまうからです。幸福に生きるべき自分が死によって滅んでしまうからです。本当に幸福な人生は死によって滅んでしまうものであつてはなりません。

皆さんは「広い門」から青山学院に入って来たのではありません。つまり自分の幸福だけを人生の最終目的とする生き方をする準備のために学問をするのではありません。イエス・キリストは「狭い門」から入りなさい、と勧められます。そして青山学院の教育は皆さんも知っている通り、キリストの教えに基づいた教育を目指しています。狭い門から入り、細い道を忍耐強く辿る人生の準備のために、皆さんは教育を受けるのです。

「青山学院教育方針」には「神の前に眞実に生きることが掲げられています。現代の日本社会で、神の前に眞実に生きる人のいかに少ないかは、皆さんも良く知つておられるはずです。神の眞実を信じなければ、神の前に眞実に生きることはできないからです。皆さんが青山学院の教育の中で「眞実の神」を見だし、よく知ることを望んでいます。

また「愛と奉仕の精神をもつて、すべての人と社会とに対する責任を「進んで果たす」ことが教育の目的であると謳っています。「愛と奉仕の精神」はイエス・キリストの精神に他なりません。イエス・キリストはその生涯を通して徹底的に他の人のために生きられた方です。私たち人間は自分のために生きるように造られてはいない、これがキリスト教の人間理解です。自分の身内や利害関係のある特定の人のためにではなく、すべての人のために、社会全体のために、皆さんは責任を負っているのです。

皆さんは、愛と奉仕の精神をもつて、人と社会のために貢献する人生を目指すべきなのです。なぜなら死によつても滅びない人生がここにあるからです。私たちがこのような人生を終えるときに、私は自分の責任を全うした、成し遂げた、と満足し、自分の人生の意味を確かめつつ死を迎えることができるのです。イエス・キリストは、このような生

き方を命に通じる門と言い、命に至る細い道であると言わわれたのです。私たちは、愛と奉仕ができるよう自分の能力を伸ばし、存分にそれが發揮できる仕事に就く必要があります。

イエス・キリストは「命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない」と言われました。しかし皆さんは、この少ない人たちなのです。どうかその道を辿ってください。自分自身のために生きることだけでは十分ではありません。この世界には助けを必要としている人たちが多くいます。そのような人たちを助ける人材が必要なのです。青山学院の教育はそのことを皆さんに期待しているのです。本当の喜び、本当の充実は、私たちが他の人たちの助けになつていることを経験することにあります。イエス・キリストは「受けるよりは与える方が幸いである」と教えられました。善をされるよりも善をする方が幸福なのです。

最後に「狭い門」「細い道」は何を意味しているのでしょうか。この門も道も、一人がやつと通れるほど狭く、細いということです。つまり、友達と手をつないでは決して通れないということです。自分自身だけで通らなければならぬ道、本当に主体的になって自分の人生を取り組まなければならぬ生き方を意味します。その取り組みの中で、それぞれの個性を活かした愛と奉仕の生き方が養われて行くのです。皆さんの能力は人のために用いるとき、正しく發揮されます。意味あることに使われるとき、その能力は更に磨かれて、豊かになるのです。

皆さんにはこれから日本の国を支える大きな使命があります。日本の国に欠けているのは、人間の尊厳、人格の尊厳、自由で平等な共同体、またこれらを創造する精神です。皆さんは、これらの欠けたものを創造して行く使命があるのです。そのため英知を身につけ、正義の心を強くもつ必要があります。

青山学院に入学された皆さんすべてが、本当の幸福、神に祝福される人生の目標をめざして学院生活を続けられますように祈ります。

(高等部教諭)

信頼・喜び・感謝の御言に支えられて

川島 祥子



2003年度の歩みが始まりました。入園された3歳児40人の子どもたちをお迎えし、在園児も教職員も新たな出会いに心躍ります。在園児たちは素直に3歳児をかわいいと感じ何くれとなくお世話をしたり助けたりし受ける立場から与える立場へと変わり、大きい組になった喜びと意欲に満ちます。

私たち保育者も新年度の保育の始まりに心引き締まります。神さまから委ねられた子どもたちの保育に一貫して流れる聖書の御ことばは次の通りです。年少組(3歳)は、「信頼」(心を尽くして主に信頼し……*福音3章5節*)、年中組(4歳)は「喜び」(主において常に喜びなさい。……*フィリピの信徒への手紙4章4節*)、年長組(5歳)は「感謝」(感謝して心から神をほめたたえなさい。……*コロサイの信徒への手紙3章16節*)です。不安や緊張感の中にある3歳児たちが幼稚園は安心して楽しく過ごせるところだと感じられるように保育者は心碎きます。当然自分の思い通りにならないことに子どもたちはぶつかります。そのような時保育者が子どもたちが互に納得できるよう間に入ることは度々あります。このような保育者の対応や自分と違う他者との生活の中で大人や仲間に対して信頼感が養われていくのです。信頼のないところに自ら育つ力は発揮されません。この年少の時は子どもに与えられた力がその人らしく存分に表されるために備え待つときのように思えます。力を発揮しながら年中の子どもたちは身边にあるあらゆるもの遊びの中に取り入れ、新しい発想をしながら遊びを充実させていきます。創り上げていく喜び、充実していく喜びに向かっていくのです。しかしその過程で内から溢れてくる力をうまく発現できなくて混乱したりする時、保育者

は道筋をつけながら遊びを深めていかれるよう援助します。各々が課題に直面し乗り越えていくために保育者もどう子どもに関わるべきか問われます。年長になると、変化していく自分と仲間との関係にとまどい人も出てきます。共に生活する仲間との様々な経験の中で自分もまた与えられ故されている存在であることに気づき、何よりも神さまに守られ恵みに支えられていることに心から「ありがとう」と、言える時を迎えてほしいと私たちは願って保育にあたります。この感謝は内に秘められるというより、世界に向かって、見る力・考える力・創る力・挑む力をもって世界に関わる姿として表されていくのではないでしょうか。自分という存在の確かさを掴みとりながら他者に向かっていくものと考えます。その中で子どもたちは自分中心の思いと他者への思いの間で揺れるのです。何よりも子どもたちが心の経験として「互いの存在を喜び合える」こと、すなわち互いを生かし共に生きる喜びを重ねていってほしいと願うのです。「その中で最も大きいものは、愛である。」(*コリント信徒への手紙13章13節*)の通りです。私たち保育者は子どもたちのからまつた糸をほぐしていくように、問い合わせ投げかけ引き出しそして向き合つてこうとする者です。幼稚園のすべての営みが神さまの守りとお導きに支えられ、神さまの存在を感じとれるようなものであるようにと祈るものであります。

最後に今年一月に幼稚園の卒園式同窓会である「いとしきの会」から三本の糸杉が幼稚園に贈られ植樹されました。糸杉の木に皆様からのお支えを覚えて幼稚園スタッフ一同励んで参りたいと思います。

(幼稚園主事)

一日の生活は礼拝から

樋 口 善 一



幼いからだ全体から命があふれ出でてくる120名の元気な1年生をお迎えすることができ、うれしさでいっぱいです。1年生の皆さん、そしてお父さま、お母さま、青山学院初等部へのご入学を心よりお慶び申し上げます。

青山学院は、1874(明治7)年に米国より派遣された弱冠23歳の若い女性宣教師、ミス・ドーラ・スクーンメーカーによって女子小学校として開校され、今年創立129年を迎える歴史と伝統に支えられた学校です。めまぐるしく時代が変わり、生活環境が大きく変化する流れの中で、青山学院はキリスト教信仰に基づく教育を堅持してきました。したがって、青山学院の各部それぞれの段階に応じてさまざまなキリスト教行事やキリスト教活動がおこなわれ、大切にされています。

初等部での一日の生活は礼拝からスタートします。聖書のことばに耳を傾け、感謝の心をもって共に祈り、静かに自分を見つめるひとときです。私たちは、「ひとりひとりかけがえのない存在として神さまから命と賜物をいただいている」のです。「ひとりひとり」の存在そのものに価値を大切にする生き方は、自分だけではなく、他者と「共に生きる」という生き方でもあります。このことは、人が人として生きるために基本と考えています。つまり、キリスト教に基づく世界観、人間觀、価値觀が土台になりますから、神と人という縦の関係を絶対的な関係と捉え、人と人、人と自然、人と社会という横の関係の中で共に生きる大切さを日々の礼拝を通して、子どもたちは自然に学んでいきます。

現在の初等部の前身は、三井信託銀行の創設者であり、日本ロータリークラブの創始者である

米山梅吉先生の私財により、1937(昭和12)年に別法人、青山学院緑岡小学校として再開、発足されました。初代校長となられた米山梅吉先生は、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である」(マタイによる福音書7章12節)という聖書の教えを毎週の礼拝では、いつも子どもに説いて聞かせておられたそうです。そしてご自身も奉仕の一生を全うされました。1946(昭和21)年戦後の新しい教育のスタートと共に学校法人青山学院に属する学校として青山学院初等部と改称し現在に至っています。その教育理念は、搖るぐことなく、キリスト教信仰に基づく姿勢で貫かれています。

青山学院は「地の塩、世の光」(The Salt of the Earth, The Light of the World)という聖書のことばをスクールモットーとして掲げています。毎日の礼拝をとおして語られる聖書のことばは、ひとりひとりの心を照らし、ひとりひとりの行く手を導く大きな光となることでしょう。僅から人の児童で始められたスクーンメーカー先生の掲げた光は「まことに小さな光」でしたが、129年に及ばんとする青山学院の歩みは、「暗き場所」を照らす「世の光」として、また、社会に味付けをする「地の塩」として、その時々の先輩に受け継がれ今日に至っています。今年度、青山学院のファミリーとして新しく加えられた120名の若い命が、神と人とに愛されながら、多くを学び、自分の賜物を生かし、「地の塩、世の光」を受け継ぎ、次の時代へ向かって実り豊かな歩みをされるようにと期待しています。

(初等部部長)

中等部新入生の皆さんへ

—自分の夢を広げてください—

布施 英俊



新入生の皆さん、中等部へのご入学おめでとうございます。何年か前の新聞にある大学付属校のこんな面白い広告がのっていました。大きく「楽」という文字が書かれ「ラク」と読む人より「たのしむ」と読む人を待っています、という広告です。次のような説明が書き加えられていました。「自由な時間の中で自分の『夢』を育てよう —『楽』をするために付属校に入学するのではなく、この自由な時間の中で『楽しみ』を創り出し自分の『夢』を広げてください。」この新聞広告はそのまま中等部にも当てはまります。高校、大学受験がなく自由な時間を十分に与えられているあなたがた新入生は、その自由な時間を「楽」をしてなまけるためではなく、自分の「楽しみ」を創り出し、自分の「夢」を育てるための時間として活用してほしいと願っております。大学までつながっている中学の良さの一つは、その点にもあるのです。

ところで、今から二十数年前の三月下旬のある夜、突然、卒業生のK君から電話がかかってきました。K君は初・中・高と青山学院で過ごし、哲学志望のため大学は他の大学へ進学しました。その大学は日本でも最高峰と言われている大学ですが、電話の内容は次のようなものでした。「自分は今日、大学を無事、卒業しましたが、この大学で4年間学んできた自分の母校はこの大学ではなく、初・中・高と学んだ青山学院であるという事がハッキリと分かりました。世間の評価はこの大学の方が高いのですが、しかし、この大学では人間はどう生きるべきなのか、人間にとつて何が大切なのか、そうした人間教育が行われていません。学生は有名進学校から来た秀才ぞろいですが、入学と同時に4年後の就職のために

お互いをライバルと見なして、心を打ち解けあう事をしないのです。自分の利益しか考えていません。その点、青山学院は違いました。青山では神を愛し人を愛して生きる事の大切さを礼拝を通して教えられてきました。そこで学んだキリスト教の精神が、どれ程自分を支えてくれているか、そういう教育をしてくれた青山学院に学べた事がうれしく誇りに思われ、自分の母校は今日、卒業したこの大学ではなく青山学院であるという事を是非、先生に伝えたくて、大学の卒業式を終えた今日、突然お電話をしたのです」— こういう内容でした。

日本の社会では学校の良し悪しを入学試験の偏差値によって決めがちですが、学校は人間教育を行う場ですから、その学校がどういう人間を育てようとしているかという教育方針が大切なわけです。青山学院は「地の塩、世の光」という聖書の言葉を教育のスクールモットーとしてかかげています。この文豪のはじめに、ある付属校が入学する生徒に「自分の『夢』を広げてください」と呼びかけている事を紹介しました。青山学院は、自分一人のためではなく、人々が幸せになるために、少しでも住みよい社会を作り出すために自分の「夢」を広げていってほしいと願っている学校なのです。

(高中部副部長)



高等部新入生の皆さんへ

小林 和夫



青山学院高等部新入生の皆さん、入学おめでとうございます。まさに今、始まったばかりの高校生活。皆さんの中では期待やら不安やらさまざまな思いでいっぱいのことでしょう。

ちょうど私は買ってきたばかりのまっさらなとても大きなキャンバスを前にしています。これから3年かかって大きな絵を描くのです。あなた自身の、あなたらしい絵を描きましょう。せっかく描くのだから最高の絵を描きましょう。その絵があるいはその絵を描いているあなたの真摯な姿が誰かの心に感動を与えることができたら、すてきですね。あなたはどんな絵を描きたいですか。

高校生活がはるか昔のことになってしまった私が見て、皆さんのが今、立っている地点はとてもうらやましく思えます。皆さんには学校に来て、勉強したり、クラブ活動をしたり、クラスや生徒会の活動に取り組んだり、色々な友人たちと出会い交流することを通してこれから多くのことを学び吸収してゆくのです。一日の時間の大半を自分を磨き、高めるために使うことができる。これはとても幸せなことです。今は人生の土台を作る時。みずみずしい好奇心と向上心をもつて、昨日の自分より一步前進するつもりで自分を磨いて下さい。現実の社会は厳しさを増しています。若い日々に知力、体力、気力を培い、問題山積の現代社会の中でしっかりと生き抜き、さらに自分が薦めたものを人のために役立てていく底力をつけておきたいものです。私自身の経験からすると、二十歳をすぎるとなぜか坂道をころげるよう時間が流れ去っていきます。その点からも、皆さんが今までにスタートした10代後半の3年間はとても貴重です。是非大切にすごしてほしいと思います。

高校時代に私がやったことで良かったなと思うことがあります。それは聖書を一年かけて読んだことです。私は両親がクリスチヤンの家庭に育ったので、小さいころから日曜日には教会学校に通っていましたが、高校1年の時には惰性で教会学校に通うことになると感じ、もう通うのはやめようかと思っていました。そんな時、たまたま夏休みに色々な教会の高校生が集まるキャンプに参加し、そこで暖かい雰囲気がとても好きになりました。そのキャンプで、ある牧師先生から聖書を一年で読み切ることを勧められました。1日3章、日曜日に5章読むと、一年で読めるというのです。今から思うと我ながらよく続いたものだと思いますが、創世記第1章から始めて、しばしば数日分をまとめ読みをしながらも一年後に読み終えることができました。その大半は忘れてしまつたものの、読みながら何かしら大きな力を感じました。そこに光を感じました。その光とは、神の独り子であり、神そのものであるイエス・キリストでした。人間がいかに罪深くとも、現実がいかに暗くとも、救い主であるイエス・キリストという希望があると思いました。こうして私は高校2年の終わりにクリスチヤンとなりました。このことは私にとって人生の土台といえることでした。

皆さんの目の前に広がっている貴重な時間は神から与えられたものです。そして私たちは神によって創造された存在です。一人一人が神の作品であり、だからこそ一人一人が尊い存在です。神は一人一人を深く愛して下さっています。これから色々なことがあるでしょう。神が支えて下さっていますから、あなた自身を大切に、3年間を大切に、自分らしい豊かな高校生活を頑張って下さい。

(高等部1年学年主任)

コメニウスと今日のキリスト教教育

前之園 幸一郎



ご入学おめでとうございます。大学というこの新しい環境の中で、みなさんは多くの期待と夢を持つて本学の学生としての生活をすでに始められていることと思います。これからのみなさんの学園生活が楽しく充実したものとして展開されるように祈ります。そして新学期のこの機会に、青山学院のキリスト教教育について少々考えてみましょう。

みなさんは、すでに「青山学院教育方針」を読まれたことと思います。その中の「神の前に眞実に生き真理を謙虚に追求」するとの一節は、名句であり実に含蓄に富む言葉です。この言葉の背後には、考えるべきヒントと多くの歴史が秘められております。その一つの事例として17世紀のボヘミアの教育者ヨハン・アモス・コメニウス(1592-1670)について見ることにしましょう。

カトリック勢力とプロテスタント勢力とが激しく争う戦乱の時代に、コメニウスは新教徒の牧師として祖国ボヘミアで活躍しました。理不尽な弾圧と国外追放の苦難の中で、人類の破滅を救う唯一の道は未来の世代の子どもたちの教育によるしかないとコメニウスは考えました。その思想をまとめたものが「大教授学」です。その中で彼は、子どもの教育は母親の胎内からはじまると言っています。

コメニウスによると、被造物としての人間は、母親の胎内、地上、天の三つの生命の宮所が与えられています。そして、母親の胎内で生活は、現世の地上的生活準備のためのものであり、この世におけるわれわれ人間の生活の充実は天における永遠の生活への準備のためだとされています。その前提から、人間に与えられた三つの特性、すなわち1) 理性をそなえた被造物であること、2) 被造物の支配者である被造者

であること、3) 創造者の似姿としての被造者であることが、現世における人間の三大目標であり、また教育の目的でなければならないとコメニウスは考えました。これは、具体的にはあらゆる事物を知る者となるための「学識」、さまざまな事物と自分自身の支配者になるための「徳性」、万物の源である神に目を向ける「敬神」の三つの目標を意味します。

コメニウスは、この三者の種子は可能性としてすべての人間に与えられており、その実現をはかるのがキリスト教教育の任務だと考えました。そして人間は、その可能性の実現を通して神によって与えられている自らの尊厳と卓越性を自覚して生きることができます。さてその人間能力の実現はどのようにしたら可能となるのか、コメニウスは、容易に、間違いないく、愉快に、しかも着実に学習する方法はないかと考えました。当時の教育が、「おそらくむごい教育方法がとられ、学校は子どもたちの折檻場であり、知能の拷問室である」(『大教授学』第11章7節)と思われていたからです。コメニウスが到達したのは、自然に学び自然のなすところを模倣する学習の原理でした。

自然は事をなすのに時期を誤らない。自然は材料を準備した後で仕事にとりかかる。自然は事をなすのに秩序正しく順々に運んでゆく。自然は事をなすのに決して一足とびではなく、一步一步と確実に進むなど、多くの原則をコメニウスは明らかにしました。

今日、世界の平和に暗雲が垂れこめています。この時代状況は、現代のキリスト教教育の課題は何であり、「真理を謙虚に追求」する姿勢の意味は何かをわれわれがコメニウスにならって模索することを求めていくように思われます。

(女子短期大学学生部長)

お天道さまが見ているからー「人」を超えたもの

西澤宗英



われわれは、日々様々なところで、「こういうことをしてもよいだろうか」と考える場面に出会います。そうした行為の中には、倫理的・道徳的、場合によっては法的な非難の対象となるものもあります。多くの場合は、そうした非難の対象となる行為とそうでない行為との間に、自らの自由な意思決定に基づく選択の余地があります。それゆえ、普通は、非難の対象となる行為をしないという選択をするでしょうが、場合によっては、「見つからなければいい」といつて、それと反対の意思決定することもあるのではないかでしょうか。「見つからなければいい」というのは、自分以外の誰か他の「人」(お店の人、先生、警察など)を念頭に置いています。「人」に見つからなければいいのでしょうか。

「お天道さまが見ているから」ということはありました。「ありました」と過去形で書くのは、残念ながら、今はもうほとんど聞かれなくなってしまった言い回しのように思えるからです。

「お天道さま」というのは、具体的な「人」を意味しているものではありません。ですから、「お天道さまが見ているからそれをしない」というのは、「人」との関係で自分の行動を律するのではなく、目には見えないけれども「人を超えたもの」の存在を前提として、そのようなものに対する関係で、自分の行動を律するということです。

「青山学院大学」は、その教育が「永久にキリスト教の信仰に基づいて、行なわれなければならない」と定められている「学校法人青山学院」の設置する学校です。皆さんは、キリスト教の礼拝の形式で行われる

入学式の瞬間から、在学中、授業や様々な礼拝を通して、キリスト教とその信仰に触れる機会があるでしょう。青山学院のキリスト教活動は、クリスチヤンだけでなく、すべての学生・教職員に開かれています。

「信仰」に入るということは、「あることを信じる」ということであるように思います。「神様が見ておられる」ということを信じるのもその一つでしょう。すべての人々、その行いを、神様がつねに見ておられるということを「信じる」ことです。「神様が見ておられる」と思えば、それが自分の行動を律する基準にもなるでしょう。

クリスチヤンでなければ、「神様が…」とは思えないかもしれませんか。それはそれぞれの人によって、「仏様が…」でもいいわけですし、とりたてて宗教に帰依しているわけではない場合には、「お天道さまが…」ということになるでしょう。要は、「(目に見えないけれども) 人を超えたもの」を信じることができるかどうかです。

(大学副学長)



青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料 その3

—明治期和訳聖書:ブルガリア語・ロマ語聖書—

氣賀健生

資料センター所蔵文献・史料紹介第3回は、まず明治21年版旧新約全書です。「耶穌降生千八百八十八年、米国聖書会社、日本横浜印行」となっています。和訳の訳文を翻見したところでは、その後の大正・昭和初期年間に使用されたものとはほぼ同じです。即ちプロテスタント教会側の旧新約聖書和訳は、ほぼ明治中期にその基本形が完成されていたと考えられましょう。当センター所蔵のものは原本がかなりいたんでいて、白い厚紙のカバーで覆われています。その表紙には墨書きで「聖國ノ志アル人此書ヲ学ハザルベカラズ」に始まって、「真理ヲ知ラント欲スル人……己ノ罪ヲ感スル人……等々、大演説が書きかれています。裏表紙を開けると、そこにも長々と宗教論が書きかれていて、こちらには「明治廿一年五月二十七日、眞五郎」とサインがあります。旧約の部分は各書別にページがうたれ、新約は391ページ。定価七十五銭です。なお、「静岡県吉原市昭和通り日本基督教団吉原教会青年会」のゴム印が押され、これが青山学院の入手以前の所有者であったと察せられますか、本学の受入れ記録はなく、その経緯も不明です。

次は、旧新約全書、耶穌降生千八百九十六年、大日本聖書館 明治二十九年 日本横浜印行 です。

これは30×22cm、厚さ8.5cmの超大型ですが、保存状況が思わしくなく、半壊状態なので、至急修理をするでしょう。大型のもう一冊は明治三十七年三月三十一日、米国聖書会社版、編集者ケー・イー・アウレル。これは美事な保存状態です。両方とも「青山学院藏書」の大型印があるだけで、所蔵に至る経緯は不明です。いずれも皮表紙、堂々たる装本です。

この他上記ほどの大きさではないにしても、大型の旧新約聖書が数点所蔵されています。発行はいずれも明治初期乃至中期、和訳文の内容はおなじですが、印刷の字体

がそれそれ異なるので、この時期日本に於て既に聖書印刷が盛んに行われていたことが推定されます。いずれも皮表紙の立派な装本です。

次にHoly Bible in Japanese:Romaji Edition。このローマ字版旧新約聖書は、恐らく外來の宣教師などのために出版されていたものと察せられますが、当センターが所蔵する3点はいずれも1892年版、Bible Societies' Committee for Japan 編、Meikijo Co.Yokohama発行です。それでも、何部ぐらい印刷したかわかりませんが、このような立派な聖書（いずれも皮表紙本格装本です）のローマ字版の需要がかなりあつたものと考えられます。日本キリスト教宣教史研究の思いかけない切り口のひとつになるかもしれませんね。以上のローマ字版日本語聖書はすべて旧新約聖書ですが、日本語訳はBible Societies' Committee for Japan 編とありますから委員会の仕事であったと思われます。

これらとは別にヘボン(J.C.Hepburn)訳のローマ字版新約聖書もあります。1880年版、横浜の米国聖書協会出版でWarera no Shu IYESU KIRISUTO no SHINYAKUZENSHOと題されています。ローマ字表記の文体そのものは文語体で、例えば「山上の垂訓」は“Kokoro no mazushiki mono wa saiwei hariteten-koku wa sunawachi sono hito no mono nareba nan”と表現されています。

本学史料センターが所蔵する聖書の歴史的稀蔵本を紹介することが、本稿の本来の目的ですが、特定の研究者・研究機関を除いては、一般に目にする機会の少ないと思われる外国語聖書を2点御紹介しましょう。

どちらも最近のもので、歴史的史料とは言い難く、珍しいというだけのことですが、連載第三回の後半、少し視点を変えてみては如何でしょうか。

そのひとつは、ブルガリア語聖書ヨハネ福音書

EBAHTEANE OT NOAH です。小型ポケット版で簡易装丁、ヴァルナの福音メソジスト・エピスコバル教会、1992年版です。1992年9月、世界メソジスト協議会 World Methodist Council がブルガリアのヴァルナで開催された時に、メソジスト歴史学会理事会が併行して行われ、これに出席した筆者がブルガリアの教会側から贈られたものを、当資料センターに収めたものです。

メソジスト教会にとって、特に主張ではない旧共産圏の都市で世界大会が開かれた理由は、共産主義支配権力のもとで、度々投獄されるなど徹底的な弾圧を受けながら、その信仰と伝道を守り抜いたひとりの牧師を讃美するというイベントのためにありました。東欧共産圏体制崩壊直後のこととて、街で見かける人々は、始めて自由を手にしたもの、その自由をどう使って良いかわからずに、ただボーッとしていた。というのがおおまかな印象です。

次にロマ語またはロマニ語（ジブシー語）のヨハネ福音書。恐らくは日本にもこれ一冊だけと思われる珍品の、本学資料センター所蔵のいきさつは次の通りです。

1980年、国際歴史学会がルーマニアのブカレスト（ブクレシュティ）で開催され、日本からも筆者夫婦を含め40人ほどが出席しました。チャウシェスク共産政府の独裁政治下、共産党要人のみ豪奢な羽振りの反面、農業国ルーマニアの農村のマーケットにしなびたキュウリとタマネギが数個、という有様が印象的でした。学会のあと、筆者夫婦はレンタカー（があったこと自体一驚でしたが）で、国内各地を見てまわったのですが、至る所でボリスに尋問され、挙句の果てに西部国境のオラディアでは一時バスポートを取上げられるという破目になりました。筆者が女連れてなく男ひとりであつたら、消されてしまったかもしれません。

学会の会期中に、ひとりのジブシーの青年がソツと筆



ローマ字版新約聖書

者に手渡したのが、ここに紹介する 'O Lacio Nevimos sa Ramosaideasles D Joano' ヨハネ福音書で後に筆者から本学資料センターに寄贈したものです。これを持っていることが知れるとボリツィア（警察）につかまる。とビックビックしていた青年の様子を思い出します。或いは、つかまりそうになったので、明らかに外国人と見える筆者の手に「緊急避難」させたのかもしれません。そんな雰囲気でもありました。

ロム（イギリスではジブシー、ドイツではツィゴイナー、フランスではボエミアン）は、9~10世紀ごろ西北インドの原住地から、世界各地に散らばって放浪し、それぞれの国の言葉に影響されて変容したロマ語が、近代に至っています。勿論彼らは元来文字をもたず、その散らばって住んだ国の言語の数だけのロマ語が、20世紀になつた頃から、互いに何の関連もなく、主として周辺の研究者の手によって書かれるようになりました。漸く1990年になつて、世界ロマ会議がひらかれ、表記法と文法の標準化が試みられましたが、現在までの研究進捗状況については、専門外の筆者のよく知るところではありません。ここに紹介する聖書は、当然ルーマニア語系ロマ語です。勿論筆者は一語も読めませんが、「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった…」というヨハネ福音書の特徴的な出だしの数節を、丹念に逐語比較して、表題の Joano (ヨハネ) 福音書と推定し、東欧語に精通する友人の研究者に聖書と確認して頂きました。ロムについての情報の決定的に少ない日本から考えると意外と思われるかも知れませんが、ヨーロッパのロムの大半は（詳説の域を出ませんが）キリスト教徒ということです。もっともそれは彼らの居住地と居住様態によって千差万別ですが、どちらかといえば、正教系に近いものが多いということです。

（大学名誉教授）



ロマ語（ジブシー語）ヨハネ福音書

『聖書の子ども観』(児玉依子著)

松浦 浩樹

「子ども」の存在が、おのれの時代の中で、どのような概念、通常の下に捉えられていたかを描く子ども観の歴史的、社会史的な優れた研究が国内外で多数展開されるようになって久しい。主に、「家族」、「学校」、「国家」等との関連の中で論が展開されている。今回紹介させていただくのは、聖書の中に見られる「子ども」がどのように取り上げられているかを教育の観点から探し、キリスト教信仰が土台となる保育・教育の一助となることを願ってまとめられている『聖書の子ども観』という書物である。我々青山学院の教育の一端を担っている者として、作者・児玉氏の願いとも言える結句「キリスト教に基づく保育・教育は、旧約から
イエス・キリストに至って最も鮮明に命じられている子どもから学ぶということを最も要請される筈である。子どもは発達、個性などの観点から対象化される以前に、何よりもまず保育者、教師から愛されなければならない。その上で、保育者、教師と共に神を愛し、信頼する生活に入れられることが必要である。キリスト教に基づく保育・教育とは、このような子どもとの日々の生活の中から保育者、教師が保育・教育の根拠と目的を学びとり、検証してゆくわざ」(125ページ下線筆者)を目の前の子どもたちとの生活に照らし合わせて振り返る必要を感じた。それでは、その旧約から新約にいたって最も要請される筈へと深化する子ども観は、どのようなもので、今の我々に、どのようなメッセージを投げかけてくれているのか。

旧約では、子どもはイスラエルの使命を受け継ぐものという大前提の下に受容され大切にされ、それゆえ、その使命を継ぐ、継がない如何によっては拒否的状況におかれることでもあった。それは、使命の枠内で生きることを子どもに求めることもある。新

約時代にイエスは「預言者、詩編」に見られる子ども観を示しながら、神と人間との人格的関係の基本を示し、旧約の子ども観を新たに深化させた。イエスは、日常のありふれた「あるがままの子ども」、無邪気に遊び、保護が必要な子どもそのものを当然のことく、信仰的生活の啓発に取り入れ、事実、愛された。「イエスご自身が「神との親子関係に生き、それを全うしたからこそ、イエスにとって人間の親子関係における子どもを、神と人間との関係を教えるために用いることが可能だった」のであり、「子どもはイエスによってそのありのままの姿において受け止められつつ、しかも大人に対して信仰における神との親子関係を回復して、新しい生命を得るために導き手にされているのである。」(122~124ページ)

「あるがままの姿」を受容すること、この言説は、現代の教育、特に保育において基本、根本的なこととして、我々保育者の中に根付いている。しかしながら、イエスが我々人間と共に苦難の中に歩まれながら示された子どもの「あるがまま」の受容の姿に、聖書を通して立ち返ると、それが「我々人間には如何に難しいことかと思われる。もちろん「あるがまま」の子どもというものは「無配慮、無教育」のことを言うのではないか、憲し、保護し、教育・保育の必要な子ども(人間)を何らかの理由や理屈、意図を抜きにして、まずはあるがままを受けとめ、愛すこと、イエスが苦難の中でも自然のこととしてなさっていたことを我々は、心して実践せねばならない。それは子どもに対してだけでなく、この多様な社会の成熟に向けて、大人社会にも一つのメッセージが投げかけられているのではないだろうか。

(幼稚園教諭)

日本ホーリネス教団 坂戸キリスト教会

田 中 立 子

坂戸キリスト教会は、池袋から東武東上線に乗り、小一時間ほどの位置にあります。聖日には毎週200名程の信徒が集まり、聖日礼拝を守っています。交通の便は必ずしもよいとは言えず、最寄りの坂戸駅から車で10分、歩けば45分かかる田園の中に建てられた田舎の大きな教会です。

坂戸キリスト教会の日曜日は大変にぎやかです。早朝礼拝、第一礼拝、日曜学校礼拝及び分級、グリーンチャペル礼拝、第二礼拝、グリーンチャペル・ナイト礼拝。合間に子供聖歌隊ウインズ、グロリアクワイアなどの練習もあり、一日中讃美の声が絶えるときはありません。礼拝で捧げられる讃美には多くの祈りと練習と工夫が重ねられ、讃美を捧げるグループも聖歌隊に限らず多くの教会員が奉仕をしています。

多くの教会で組織化されているのと同様に、私たちの教会でも青年会、婦人会、社年会などに分かれて交流の時を持ちます。祈祷会は毎週木曜日、午前と午後に持たれています。さらに、祈りの仲間として同じ地域に住む教会員でグループを作り、これをコイノニア・グループと名付け、お互いに祈りあうことで教会員同士の交わりを深めています。

このような中で青年の活動はさらに活発です。親睦のために様々な計画をたて、ホームページの中に設けられた掲示板など活用して交流し、祈りあっています。昨今叫ばれているＩＴ化ですが、わたしたちの教会では青年会が最先端の利用者です。平日には教会のホームページを上手に使いこなし、携帯電話でコミュニケーションをとり、聖日には教会で顔を合わせて交わりの時を持っています。

坂戸キリスト教会は今年で40周年を迎えました。



日本ホーリネス教団

坂戸キリスト教会

坂戸市坂戸738

〒350-0209

☎0492(81)5540 FAX0492(84)5334

教会の来し方は、

30周年の記念

として出版した「こうして教会は」にまとめられています。私たちの教会は使徒行伝を指針とし、目標として次のようなことを掲げています。1. ファミリー・チャーチ（神の家族的な愛に満ちた教会）2. コミュニティー・チャーチ（地域に根ざし働きかける教会）3. ミッション・チャーチ（世界宣教に燃える教会）4. ボディ・チャーチ（機能的組織をもつキリストの体なる教会）5. レイセンタード・チャーチ（信徒中心の活動的教会）

坂戸キリスト教会員として信仰生活を送る中で私個人が日頃特に強く意識させられるのは、2と3の目標です。

2. については、地域に根ざさない活動はない、と言い切っても良い程だと私には思えます。クリスマスなどの行事も教会という建物の中で行うだけではなく、文化会館やコミュニティーセンターを会場にすることで地域の人々が来やすい工夫をしています。また、得られた入場料などを地域の福祉のために捧げています。

3. については、毎週の聖日礼拝の中で、派遣されている宣教師の為に熱心に祈っていることで、意識されます。日々の生活の中では、常に宣教報告がメールで配信されており、宣教の課題の一つ一つの為に祈ります。

ざつと思い付くままに私の教会のことを書いてまいりました。お近くにいらした際にはぜひ、坂戸キリスト教会の集まりに加わって下さい。詳しい集会案内はホームページ(<http://www.jhc.or.jp/sakado/>)を御覧いただきたいと思います。

(大学庶務部経理課職員)

宗教センターだより

幼稚園より

新しい年度の始まりです。

毎年この季節、幼稚園は大きな喜びと心地よい緊張感に包まれます。最高学年になったことが心から嬉しく、誇らしげな姿の年長組。一つ大きな学年になったことを喜びつつも、どこか緊張気味の中年組。そして、これから始まる未知の園生活に期待と不安を感じながら入園してくる年少組。今年度も一人一人かけがえのない120名の子どもたちと共に過ごす生活が、神さまのお導きのもとに恵み豊かな歩みとなりますように、心から願う次第です。

1学期の主な予定は以下の通りです。

4月8日(火)	始業式
4月10日(木)	入園式
4月17日(木)	イースター礼拝
4月23日(水)	お楽しみ会食
4月23日(水)	年中・年少組お誕生日会
4月24日(木)	年少組お誕生日会
5月2日(金)	春の遠足
5月12日(月)	母の日礼拝
5月16日(金)	お楽しみ会食
5月21日(水)	年中・年長組お誕生日会
5月22日(木)	年少組お誕生日会
6月14日(土)	ファミリーテー
6月18日(水)	年中・年長組お誕生日会
6月19日(木)	年少組お誕生日会
6月20日(金)	お楽しみ会食、防災訓練
7月4日(金)	お楽しみ会食
7月8日(火)	お誕生日会
7月11日(金)	終業式
	新一年生同窓会

月に一度のお誕生日会は、その月に生まれた子どもをお祝いします。全員で礼拝をした

後お楽しみの会をもちます。その他、大好きなお父さんお母さんの存在を改めて心に覚えて感謝を表し、一緒に礼拝をまもる日も、子どもたちにとって心から楽しみなひと時となっています。

(教諭 柳澤 明子)

初等部より

新しい1年生120名を迎える、新しい気持ちで1学期が始まりました。この1年も、神様の導きと守りのうちに過ごすことができればと思います。今年度は、初等部の新校舎建築が始まる年でもあります。様々な変化の中で、守るべきものを大切にして歩みたいものです。

○新1年生保護者キリスト教教育オリエンテーション

4月9日(火)～11日(金)の朝

初等部の中心であるキリスト教教育の概要と、ご家庭で大切にすることなどについてオリエンテーションを行います。

○受難週祈祷会 4月14日(月)～18日(金)

イエス・キリストの最後の1週間を聖書のみことばを読みながら味わい、ともに祈りを捧げる1週間です。

○イースター拝 4月22日(火)

イエス・キリストの復活を覚えて、日本庭園の前で野外礼拝を守ります。礼拝後、全校児童で、イースター・エッグをいただきます。

○お母さんへの感謝の集い 5月13日(火)

母の日を覚えて、神さまの恵みとしてお母さんが与えられていることを覚えて、礼拝を守ります。

(宗教主任 小澤 浩一)

中等部より

○C F活動

4月8日(火)に入学式が行われますが、その前の7日に在校生有志によるC F(クリスチャン・フェローシップ)活動をします。全校舎の掃除、特に新入生の教室をていねいに整えます。上級生の奉仕が、緊張している新入生の心にくつろぎを贈

れればと願っています。

○イースター礼拝

中等部ではイースター(4月20日)を感謝して、25日(金)に礼拝を守ります。メッセージを玉川聖学院院長のバーナード・バートン先生から伺います。バートン先生は「神の教会」宣教師として27年も日本でお働きです。

○母の日・家族への感謝の日礼拝

5月13日(火)のロング・ホームルームの時間に今年の「母の日・家族への感謝の日礼拝」をします。礼拝のメッセージは遠藤順子先生にお願いしました。遠藤先生は、作家の故遠藤周作さんの夫人です。暖かく豊かなメッセージを保護者の皆様と共に伺えることでしょう。遠藤さんはイグナチオ教会の会員で、「夫の宿題」などいくつもの著書をお持ちです。

(宗教主任 石丸 泰樹)

高等部より

○入学式、始業式

高等部では、4月7日(月)に入学式、8日(火)に1年生オリエンテーション、9日(水)に始業式と全学オリエンテーションが行われ、11日(金)より授業が始まります

○イースター礼拝

今年のイースターは4月20日(日)ですが、高等部では4月23日(水)にイースター特別礼拝を行います。

○保護者聖書の会

今年度も毎月一度、保護者のための聖書の会をもちます。聖書に初めて触れる人達の会ですので保護者であれば誰でも参加できます。青山学院の教育方針の基本にある聖書を知り、心の糧としていただきたいと思っています。

(宗教主任 坂上 三男)

短大より

短大の今年度のテーマは「平和を実現する人々

は」(マタイによる福音書5章9節)です。いま世界の平和を求めて多くの人が祈っています。私たちの身近なことから国際関係のことまで、キリスト教を通して一緒に考えてみませんか。新しい価値観や自分を見つけることができる場がたくさん用意されています。皆さんの積極的な参加をお待ちしています。

○キリスト教推薦入学者歓迎会 4月3日(木)

短大礼拝堂でキリスト教活動の説明後、教室で保護人を交えた歓迎会を行います。

○始業礼拝 4月4日(金)

青学講堂で、宣教師のロバート・タヒューン先生が「平和の実現」と題してお話をされます。礼拝後、宗教活動委員会の学生や聖歌隊とハンドベル・クワイアの隊長が活動内容の説明をします。

○礼拝堂オリエンテーション 4月8日(火)

宗教主任が礼拝心得を説明した後、オルガニストの渡辺善忠先生がリップオルガンを演奏されます。

○イースター礼拝 4月21日(月)

今年のイースターは4月20日(日)です。お近くの教会にご出席ください。短大イースター礼拝の説教者は院長の深町正信先生です。

○キリスト教活動春の研修・親睦会 4月26日(土)

短大礼拝堂と体育館で、今年度のテーマ「平和」についての学びと、先生方との親睦会を行います。

○宗教講演 5月14日(水)

講演者 日本クリスチャン・アカデミー関東活動センター所長 大津健一氏

○チャペル・コンサート 5月15日(木)

演奏者 トランペット 松野美樹氏

○サマーキャンプ・イン・軽井沢 7月22日(火)

~24日(木)

さわやかな軽井沢で教員と学生が、「平和」について共に学び、親しく交流し、友だちの輪を広げることができる合宿です。軽井沢サイクリングやバーベキューなど楽しいプログラムがいっぱいです。

(短大宗教活動センター 向野 理恵子)

大学より

○キリスト教推薦入学生オリエンテーション

4月5日(土) 11時 ガウチャー記念礼拝堂他

○キリスト教概論履修オリエンテーション

4月7日(月)～10日(木) ウェスレー・チャペル

○新入生歓迎礼拝

●相模原 4月14日(月)

●第二部 4月15日(火)

○ランチタイム・コンサート

5月、6月、7月(開催日未定)

○前期チャペル・ウィーク

5月19日(月)～24日(土)

○大学宗教主任研究叢書「キリスト教と文化 記要(18)」

鈴木有郷 「アブラハム・リンカーンにおける政治と道德の関係 - 奴隸制との取り組みを焦点に -」

東方敬信 「物語の神学の方法をめぐって」

大庭昭博 「社会倫理」再論(2) テゼからの懲想

大島 力 「預言と默示の問題
－イザヤ書の『最終形態』研究序説－」

伊藤 悟 「小児陪餐執行までの諸課題」

嶋田順好 「説教默想 主のもろもろの慈しみは
決して絶えない」

深町正信 「ジョン・ウェスレーと聖餐」

○2003年度学部選出宗教委員

(文学部) 大森秀子、河本洋子、Wayne E. Pounds、

France Dhorne、武藤元昭

(経済学部) 小張敬之、橋本清一、芹田敏夫

編集後記

4月です。本学院の入学生は各部合わせて何人でしょうか。若い時に聖書を知ることは何にも優る恩恵です。価値観、人生觀の基いに聖書に置けるからです。どうか聖書を読み、世にいう価値とは異なるそれをみつけて下さい。

(中等部・有賀)

(法学部) Gerald McAlinn, Suzy E. Fukuda

(経営学部) 玉木欽也、森川信男、Charles M. Browne

(国際政治経済学部) 支倉壽子、木村光彦、茂牧人

(理工学部) 二宮理恵、矢部義之、David W. Reedy

(国際マネジメント研究科) 井田昌之

○宗教センター・グループ活動について

各キャンパスで開かれている自由参加の研究会で、宗教主任が担当する「青山学院大学聖書研究会」の他、宗教・思想・文学・社会・自然科学・福祉・音楽など大学にふさわしいテーマをキリスト教信仰との関わりにおいて勉強する「フォーカス・グループ」(キリスト者教員が担当)があります。詳しくは「キリスト教活動のしおり」「Kairos」をご覧ください。

(宗教センター事務室)

本部より

○教職員新年礼拝

4月8日(火) 16時30分 ガウチャー記念礼拝堂

説教: 東方敬信(学院・大学宗教部長)

○イースター音楽礼拝

4月21日(月) 17時30分 ガウチャー記念礼拝堂

メッセージ: Robert M. Terhune(宣教師)

演奏: 角野 彰(高等部教諭)、飯 誠子(大学オルガニスト)

○教職員・学生のための祈りの集い

4月18日(金)、5月2日(金)、6月13日(金)、

7月4日(金) 17時10分、宗教センター

(宗教センター事務室)

前号(75号)訂正とお詫び

P.14 14行目 宗教センターだより 初等部より

司書教諭 島根照夫先生

↓

教諭 島根照夫先生

Wesley Hall News 第76号

発行: 青山学院宗教センター 宗教部長 東 方 敬 信

東京都渋谷区渋谷4-4-25

TEL.03-3409-6537(ダイヤルイン)

URL: <http://www.cc.adyama.ac.jp/user/agcac/>

E-mail: agcac@cc.adyama.ac.jp

編集 ウェスレー・ホール・ニュース編集委員会

印刷 方全社